

伊江島の野鳥



伊江村教育委員会

伊江島の野鳥

－伊江島の探鳥地ガイド－

発刊のことば

近年あらゆる分野で自然の開発が進み、野鳥のすむ世界もだんだんと狭められてきています。貴重な自然遺産を子孫に残すため私たちは、自然と調和のとれた環境を維持していかなければなりません。そのためには自然界のことをもっと知らなければならないと考え、まず鳥類についての手引き書として、本書を発刊いたします。

これまで伊江村では留鳥や渡り鳥、迷鳥を含め約110種の鳥類が確認されています。本書では探鳥に関する道具や場所、季節や鳥の行動、鳥の見分け方などがていねいに説明されており、学校における環境教育の中で、子ども達の野外活動における手引き書として、活用できるようになっています。さらに、伊江島を訪れる観光客やバードウォッチングを行う方々へ、もうひとつの伊江島を発見するガイドブックとして利用されるよう期待します。

本書の刊行をてがかりに、今後植物や動物など伊江村の自然についての調査研究を行い、将来は総合的に伊江島の自然をまとめた図鑑まで編集できればと考えています。

最後になりましたが、本書の発刊に際し、執筆から編集までご尽力下さいました沖縄県立博物館学芸員の高原建二先生をはじめ、協力していただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成9年3月31日

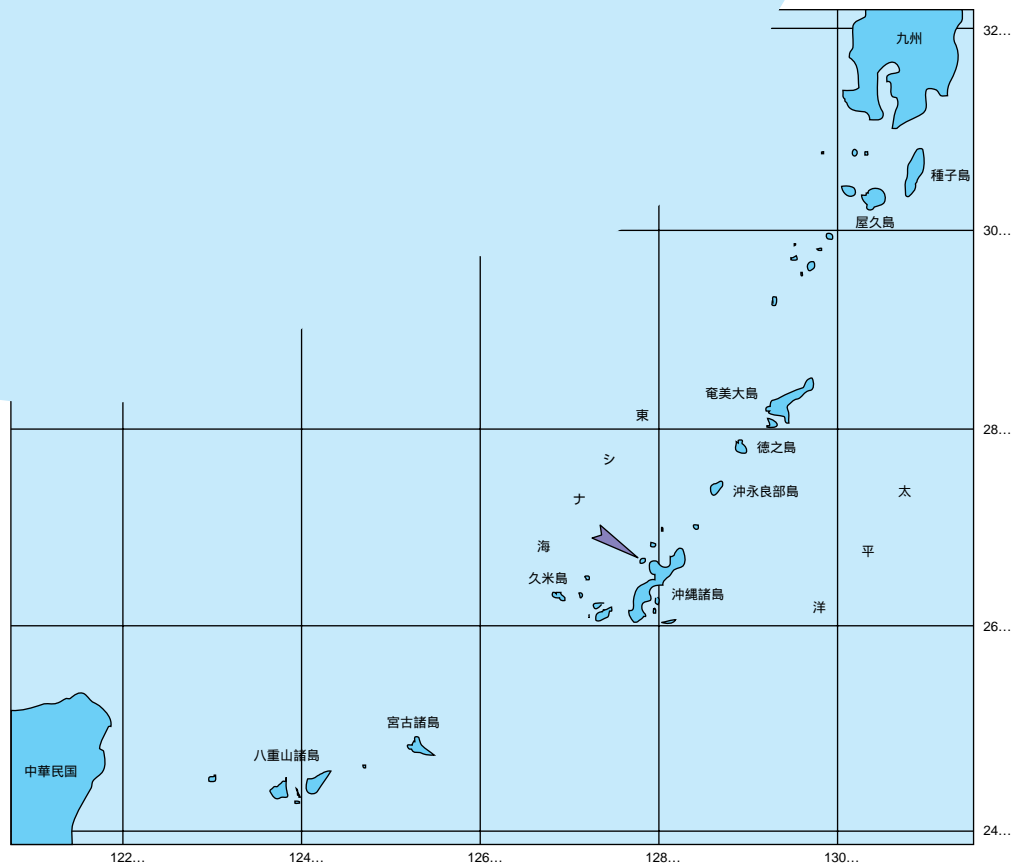
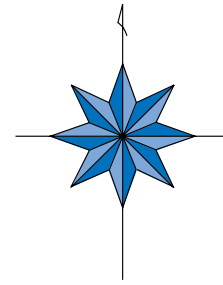
伊江村教育委員会
教育長 新城 晃

目 次

・ 発刊のことば	
・ 伊江島の位置図・地形図	
1. 伊江島の位置と自然景観	1
2. 野鳥観察に行く前に	2
3. 野鳥観察（バードウォッチング）のポイント	6
4. 鳥の見分け方	7
5. 野鳥は環境をはかるモノサシ	9
6. 伊江島の鳥類について	10
7. 伊江島の探鳥地案内	13
(1) 城山（グスク）周辺	15
(2) 伊江島空港周辺	17
(3) 青少年旅行村キャンプ場	19
(4) 農民道場周辺	21
(5) リリーフィールド公園	23
(6) 湧出（ワジィ）周辺	25
(7) 農協畜産センター周辺	27
8. 伊江島で確認された貴重種	29
9. 伊江島で確認された数少ない野鳥	33
10. 伊江島の人と野鳥の関わり	35
(1) 野鳥の方言名	35
(2) 鳥にまつわる言い伝えや童謡等	36
(資料編)	
< 伊江島の鳥類目録 >	42
< 伊江島に所在する主な文化財 >	49
< 参考文献・資料 >	53
・ 協力者一覧	
・ 編集後記	

伊江島の位置図・地形図





1. 伊江島の位置と自然景観

伊江島は沖縄島北部本部半島の備瀬崎から西方約5kmに浮かぶ総面積約22.67km²の楕円形をした島です。島の位置は北緯26度42分から26度46分、東経127度44分から127度50分の間に所在します。

島の中央よりやや東側に、標高172.2mの古生代（今から1億年くらい前）の珪石や層状チャートからできた城山がそびえたっています。この城山は「伊江島タッチュー」として遠くからでもよく目立ち、伊江島のシンボルとなっています。その頂上からのながめはすばらしく、



1967年（昭和42年）には、沖縄県指定の「名勝」として文化財にされています。

城山以外は島全体が新しい時期にできた琉球石灰岩の台地で占められ、平坦な地形をなしています。1995年度の村勢要覧によると、島面積の55.1%にあたる1,250haが農耕地となっています。また、畜産もさかんで採草場が30haほどあります。このことから、戦後米軍に提供されている軍用地と合わせると、島面積の約9割は開けた環境となっています。

島の海岸線は周囲約22kmで、大部分がモクマオウ、アダン、クサトベラなどの海岸林に囲まれています。島の北側は約60mほどの断崖（だんがい）になっていますが、島の南側は傾斜がゆるやかで、海岸部は砂浜が長く続く場所もあります。

森林面積は132haと少なく、城山周辺地域にまとまった森林がみられますが、あとは農耕地に不適な岩場などに残存林として点在するだけです。

河川がないため水資源に乏しく、湧出（ワジ）のような湧き水が海岸線に数箇所見られる程度です。このため古くから農業用のため池が数多く造られ、現在でも整備されたため池が大小合わせて20カ所以上点在しています。

主な産業は農業を中心としており、サトウキビや葉タバコ、花き（キク栽培）などの生産のほか、肉用牛が3,426頭飼養されています。

伊江島の人口は約5,500人で、城山周辺から伊江港の間に広がる西江上、西江前、東江上、西江前、川平、阿良などの集落に集中しています。しかし、島の西側にも西崎や真謝の集落が散在しています。



2. 野鳥観察に行く前に

(1) バードウォッチング(野鳥観察)とは

最近「バードウォッチング」ということばをよく耳にするようになりました。今日では身近な活動として定着しつつあるように思いますが、それでは、「バードウォッチング」とは何でしょうか。それは自然の中でいきいきとくらしている野鳥の美しい姿を見たり、鳴き声を聞いたりして自然に親しむ野外活動のことです。この活動は今から300年くらい前にイギリスで始まったとされ、ヨーロッパ各地でさかんに行なわれています。

日本でバードウォッチング(野鳥観察)が行われるようになったのは、今から60年以上も前の1934年(昭和9年)のことで、富士山のすそ野で初めての「探鳥会」^{たんちょうかい}が行われています。このとき初めて「探鳥」ということばも生まれ、飼い鳥ではなく、野生の鳥の姿を見て楽しむという活動がはじまりました。

野鳥観察には道具もさほどいりません。また一人でも手軽にできる活動ですから、いつでも、どこでもはじめることができます。

(2) 野鳥観察の服装と持ち物

野鳥観察に行く時の服装としては、野外で活動するわけですから、動きやすく、汚れてもよいものを身につけます。その場合、虫さされや草にからんで切りキズをつくらないためにも、長そでシャツや長ズボンが基本です。そして、鳥をおどろかさなないためには、ケバケバしい服装ではなく、モスグリーンや迷彩色^{めいさいしよく}など目立たない服装にします。また、冬場は防寒着も用意しましょう。

靴は底がしっかりしていて、滑らないようなグリップがあるものがよいでしょう。特に、湿地や干潟などにはいるときにはめりこんでも良いように、長グツ(ゴム長)が必要になります。材質は足音がしにくいゴム性のものがよく、厚手の靴下をはいて足にぴったりとなじませたほうがよいでしょう。

用意する物としては、野帳^{やちよう}(メモ帳・記録ノート)、野鳥図鑑、双眼鏡、望遠鏡などが必要になります。また、森林地域のように見通しのきかない地域に入る場合には、地図や磁石(コンパス)を用意する必要があります。さらに、雨に対する準備としては、折りたたみ式の傘や雨具など持っておくと役に立つでしょう。そして、野外で両手が使えるように、これらの物を詰め込んで背負うためには、デイバックなどのようなリックサックが便利です。

<野鳥観察の持ち物>



(3) 生活のしかたや季節(時期)によって鳥を分けてみよう。

沖縄県内で見られるさまざまな野鳥については、生活のしかたでおおよそ次の5つに分けられます。この分け方を覚えておくと季節ごとに野鳥の種類がわかり、観察にとっても便利です。

- 1) 留鳥^{りゅうちょう} ^{わた}：渡りをせず、沖縄で一年中くらし、繁殖もしている野鳥。
メジロ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤンバルクイナ、カワセミなど
- 2) 夏鳥：初夏の時期に渡ってきて、沖縄でヒナを育て、秋になると南方へ帰っていく鳥。
アカショウビン、サンコウチョウ、ベニアジサシなど
- 3) 旅鳥^{たびどり}：沖縄より南方に冬越しする場所があり、南下する秋と北上する春の時期に沖縄を通過していく野鳥。
ツバメ、サシバ、エゾビタキ、アカハラダカ、シギ・チドリ類など
- 4) 冬鳥：沖縄で冬を越すため、冬期に渡ってくる野鳥。
シロハラ、アオジ、ツグミ、カモ類、シギ・チドリ類、サギ類など
- 5) 迷鳥：沖縄には渡りのコースをあやまったり、台風などで運ばれたりして迷ってきた野鳥。
コウノトリ、ナベヅル、コハクチョウなど

備考：1. 留鳥の中には、繁殖しない時期に山地から平地、日本の北部から南部を行き来している「漂鳥(ひょうちょう)」と呼ばれる鳥もいます。

2. サシバは大部分が旅鳥ですが、その一部が沖縄にしばらく留まり、冬を越してしまう鳥(冬鳥)もいます。



夏鳥：アカショウビン



旅鳥：アカハラダカ



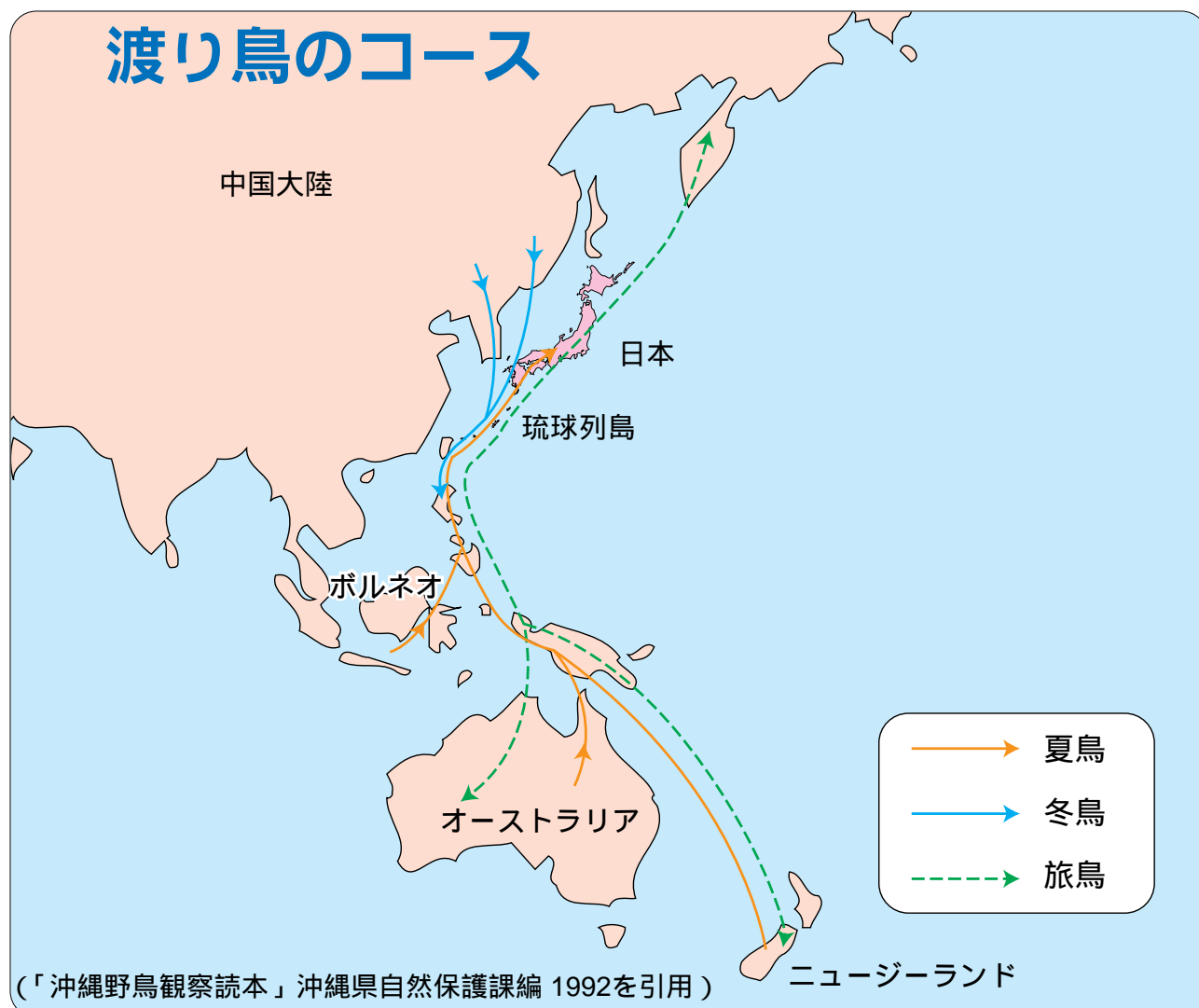
迷鳥：コハクチョウ

(4) 鳥の渡り

鳥は羽を持ち、その多くは自由に空を飛ぶことができます。そして、季節ごとに渡り（^{かいき}回帰移動）をする鳥も数多く見られます。たとえば、夏にはベニアジサシやアカショウビンなどの夏鳥が、冬にはナベヅルやハクチョウなどの冬鳥が日本にやってきます。夏鳥の場合は日本本土や沖縄が繁殖地で、冬鳥の場合は日本本土や沖縄が冬越しする場所になります。

野鳥の中には秋口に沖縄を通過し、さらに南の冬越しする場所に移動するサシバやアカハラダカのような旅鳥も数多く見られます。同じようにシギ・チドリの仲間も大部分が旅鳥です。特に、シギ・チドリ類は繁殖地がユーラシア大陸北部シベリアのツンドラ地域で、ここから寒さをさげ、沖縄までやってきます。そして、中にはチドリの仲間であるムナグロのように、オーストラリアあたりまで渡る鳥もいます。

なぜ鳥は渡りをするのでしょうか。北方の高緯度地域では冬になると寒くなり食べ物が少なくなるため、暖かくエサのとれる南の低緯度（熱帯や亜熱帯など）に渡ってくるという考えが一般的です。しかし、この気温変化やエサの量に支配されないで渡りを行う鳥もいるため、渡りの理由についてはよくわかっていないのが現状です。



3. 野鳥観察（バードウォッチング）のポイント

（1）鳥をおどろかさなような気配りをしよう。

鳥は色や音に非常に敏感で、警戒心の強い動物です。ですから、目立たない服装したり、迷彩色の布をかぶったり、ブラインドに入ったりして、鳥に対し危険を感じさせない気配りが必要です。そして、あまり近づかないことも鳥に対するエチケットでしょう。

草原や農耕地などような開けた場所では見通しがきき、鳥が探しやすくなりますが、逆に鳥は人間の姿に警戒してしまいます。道路が近くにあれば、車をブラインドかわりに使うこともできます。車から出ないようにゆっくり走らせながら近づくと、意外に接近できることがあります。また、双眼鏡や20倍程度の望遠鏡を使って遠くから観察することで、鳥に気づかれないようにすることもできます。ただ、望遠鏡は三脚にセットして使用しますから、重くなるという欠点もあります。

（2）観察に適した時間や時期をえらぼう。

森林地域で観察を行う時には、早朝行うのが基本です。早朝でも日の出をはさんで2時間くらいがよいとされています。しかしながら、伊江島では森林地域は少なく、野鳥観察には牧草地（草原）や農耕地、ため池などが中心になりますので、時間的にはあまりとらわれなくてもよいでしょう。

キジバト、イソヒヨドリ、セッカ、メジロなどの留鳥は、一年中見られますが、やはり伊江島には季節ごとに渡ってくる野鳥の種類が多いので、夏鳥や旅鳥、冬鳥の渡来する時期をえらぶことが必要です。伊江島では、特にムナグロ、チョウゲンボウ、コミミズクなど草原性の渡り鳥を観察できる秋口と冬季、春先が最適な時期になります。もちろん、夏鳥の渡来する6月頃には、ベニアジサシやエリグロアジサシが海岸近くで見られます。

（3）観察に適した場所を知っておこう。

野鳥観察はいつでもどこでもできますが、鳥がよく集まってくる場所を知っておくとより観察しやすくなります。すなわち、鳥は種類によって、よく利用する場所があります。そうした環境ごとに野鳥のすんでいる場所をわけて、観察してみることもまたひとつの方法です。

1. 森林の鳥………城山の森林のようにまとまった林がある場所では、ヒヨドリ、キジバト、ズアカアオバト、メジロなどが見られます。冬にはシロハラやアオジなどが渡ってきてここで生活します。
2. 水辺の鳥………空港近くのアマギため池や西崎の寺前ため池など伊江島では数多くのため池があります。こうした水辺には留鳥のカイツブリやバンなどが繁殖しています。秋から冬になるとアオサギやダイサギなどが渡ってきて、ここで越冬しています。

3. 畑・草原の鳥...伊江島空港周辺のように農耕地や草原が広がる場所には、セッカやミフウズラなどの留鳥がすんでいます。秋から冬にかけては、ムナグロ、チョウゲンボウ、サシバなどが渡来してきて、ここでくらしします。
4. 海岸の鳥.....浜崎海岸の砂浜、そして、ワジィの崖地やリ-フ、岩礁などでは、シロチドリ、イソヒヨドリ、クロサギなどの留鳥がすんでいます。夏場にはベニアジサシやエリグロアジサシなどカモメの仲間がわたってきて生活します。また冬季にはワシタカの仲間であるミサゴがみられることもあります。

これらの場所以外にも、堆肥（たいひ）置き場や畜舎のまわり、海岸近くのモクマオウ林なども鳥が集まりやすい場所です。こうした場所を見当して観察するようにしましょう。

野鳥は自然の中で生きていますので、野鳥だけを見るのではなく、野鳥をとりまく自然環境にも注意をはらうことも大切です。そうすることでおのずと野鳥がこのむ環境とそこにすむ野鳥の種類や生活のしかたなどがわかってきます。

4. 鳥の見分け方

(1) モノサシ鳥の大きさをおぼえておこう。

身近にすんでいるスズメやキジバト、カラスなどは、鳥の大きさを比べる際の基準となる鳥です。これらの鳥を「モノサシ鳥」として、その大きさをおぼえておくと野鳥の野外識別に便利な場合があります。

スズメは全長14.5cm、キジバトが33cm、カラスが56cmの大きさですから、大中小でその大きさをおぼえておきましょう。他の鳥を見たとき、たとえば、スズメより大きい小さいかでその判定基準ができ、図鑑などで詳しく調べるとき便利です。

<ものさし鳥>



スズメ (14.5cm)



キジバト (33cm)



カラス (56cm)

(2) スタイルに注目する。

鳥はその姿・形により種類分けされています。ですから、おおよその姿、ずんぐりしているか、むっくりとしているか、スマートか直立しているかなどに注意することが必要です。たとえば、むっくりとしていて、クチバシが平たいカモ類や縦長でスマートなサギ類など、その鳥のグループに特徴的なスタイルを覚えておく^{しきべつ}と識別に役に立ちます。



カモ型



サギ型



クイナ型

(3) フィールドマークを覚える。

鳥は種類によって、全身の色や羽の形など特徴的に目立つ部分があります。例えば、クイナ科のバンは、黄色いくちばしと赤い額、脇^{ひたい}にでる白い連続模様、尾羽の白色部などいくつかの特徴があります。こうした目立つ部分を「フィールドマーク」と言い、野外で鳥の識別を行う時有効になります。

(4) めだつ動作や歩き方、飛び方、エサの採り方などにも注意する。

鳥は種類によって特徴的な行動が見られます。例えば、キセキレイやイソシギなどはよく尾を振ります。歩き方にしても、ハトはノコノコ歩き（ウォーキング型）で、スズメはピョンピョン歩き（ホッピング型）です。さらに飛び方も種類によって異なり、よく旋回^{せんかい}して飛ぶのはリュウキュウツバメで、直線的に飛ぶのはサンショウクイやカモ類、サギ類などです。また、波状に飛ぶのはキセキレイやヒヨドリなどがあります。こうした行動を覚えておくと野外識別も楽になります。

(5) 鳴き声を覚える。

野鳥観察するとき、鳴き声も有効な手段になります。一般的にウグイスは「ホー、ホケキョ」、アカショウビンは「キュロロー、キュロロー」と鳴きますので、この声を覚えておくと姿が見つからなくてもその所在を確認することができます。しかし、ウグイスは非繁殖期には「チャ、チャ」と「地鳴き^{じな}」をしますので、同じ鳥でもいろいろなタイプの鳴き声を覚えておくことが大切です。これはよく知っている人に案内してもらい覚えていく方法が確実でしょう。そのためには、野鳥観察会に積極的に参加するのも上達するひとつの近道です。

(6)じっくり見て記録しよう。

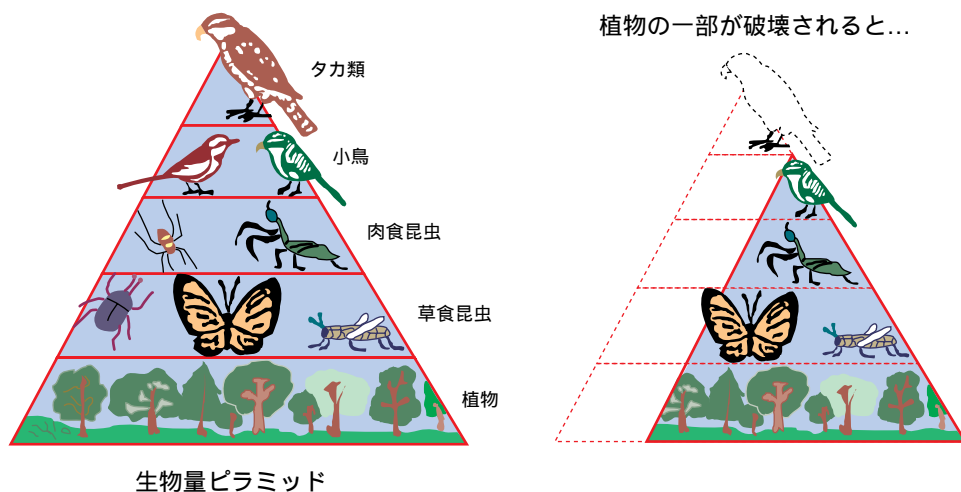
野外の出で観察するとき、観察された野鳥の目立つ部分や大きさなどを記録しておく、後で調べるときにとっても重要になります。また、いつどこで目撃したのか、どんな環境であったかなども記録しておく、鳥類の記録が集まり、次に観察に行く時の参考になります。そして、ある地域における鳥類の記録が集まっていくことによりそこにどんな種類の鳥がすんでいるかがわかり、その地域の環境保全に役立つこともあります。

5. 野鳥は環境をはかるモノサシ

「カワセミ」と言うきれいな鳥が水のきれいな川にすんでいます。しかし、川がよごれ、餌となる小魚がすめない川になると、この鳥もその川から姿を消してしまいます。また、「ツミ」のようなワシタカの仲間は、小鳥類を餌にするため、森林が減少して小鳥類がすめない環境になると、まっさきにいなくなります。

生き物の世界（生態系^{せいたいけい}）は、食われるものと食うものの関係（食物連鎖^{しょくもつれんさ}）で成り立っています。植物は太陽の光を受け、光合成をして葉をしげらせませす。その植物をチョウやバッタなどの草食性昆虫が食べ、その草食性昆虫をカマキリやトンボなどの肉食性昆虫がエサにします。その肉食性昆虫をシジュウカラやヒヨドリなどの小鳥がエサとして利用し、その小鳥類をツミのようなワシタカ類がエサにします。この関係を生物の量で模式的に表わすと、ピラミッド状の階層がえがかれます。これを「生物量ピラミッド」とよんでいます。

そして、このピラミッドがこわれて小さくなると頂点にいる鳥は入れかわってしまいます。つまり、カワセミやワシタカ類はそれぞれの環境で上位に立っている鳥ですから、その生存をささえるためには、まわりに川魚やカニ類などの多い川と昆虫やトカゲ類などが数多くすんでいる豊かな森や林がなければなりません。川の水が汚染されたり、森林が伐採されるなど環境が変わってしまうとこれらの野鳥は姿を消してしまうのです。ですから、見方によっては野鳥は環境の良しあしをはかる「モノサシ」ともなります。



（鳥630図鑑、日本鳥類保護連盟、1988を引用）

6. 伊江島の鳥類について

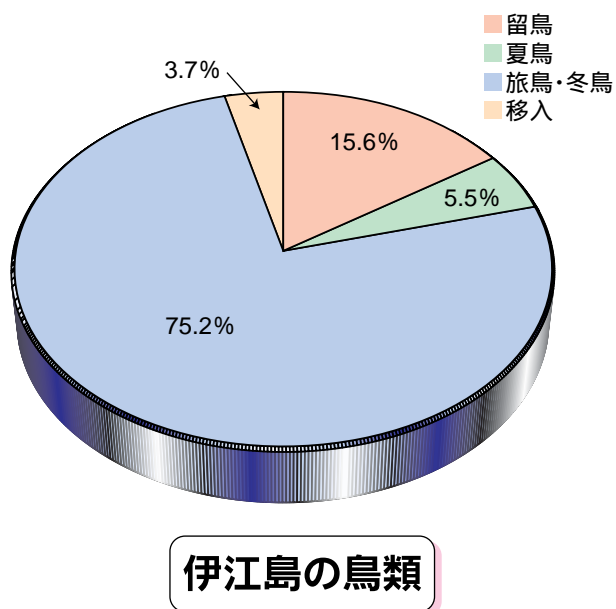
これまでに伊江島で記録された鳥類の種数は、1993年の記録では102種（帰化種を含む）とされています。この記録に1993年以降の観察記録を加えると、その数は109種（亜種や帰化種を含む）になります。これは沖縄県内で確認されている野鳥の種数418種の約26%にあたります。

伊江島で確認された野鳥の内訳を見てみると、メジロやイソヒヨドリなどの留鳥はわずか17種（移入種や帰化種を除く）と全体の約16%にすぎません。したがって、その多くはアカショウビンやベニアジサシなどの夏鳥6種と、ムナグロ、シロハラ、サシバなどの旅鳥および冬鳥の82種で全体の80.7%を占めています。つまり、渡り鳥が多いのです。こうした傾向は、沖縄県の鳥類相の特徴にもなっています。このことは伊江島を含む南西諸島が、九州の南端から台湾までの1200kmの間に島がとびとびに連なっているため、野鳥が南北に渡るコースとして利用しやすいことによるためだと考えられています。

また、伊江島で留鳥の種数が少ないことは、沖縄島北部の本部半島や国頭山地などにふつうに見られるコゲラ、シジュウカラ、リュウキュウサンショウクイ、ヤマガラ、カラスバトなどが生息していないことによるものです。これは伊江島が島面積が小さいことと、他の地域に比べまとまった森林が少ないことによるものと思われます。しかしながら、以前からこれらの鳥類が生息していなかったのか、あるいは森林面積の減少に伴い、急に減ってしまったのかいまのところ資料が乏しく何もわかっていません。かろうじてすんでいた可能性のある種類としては、方言名が残っているハシブトガラスとフクロウ類（コノハズクやアオバズク）です。

さらに伊江島では湿地や河川、干潟などの水辺環境がほとんど見られないため、シギ・チドリの仲間やガンカモの仲間、クイナの仲間などの確認種数が少ないことも特徴としてあげられます。

しかしながら、伊江島では牧草地や芝生のような草原が多く、沖縄本島の水田や河口干潟で見られるようなメダイチドリ、キョウジョシギ、セイタカシギ、エリマキシギなどが草原で観察されることはとてもおもしろいことです。おそらく、これらの鳥類にとっては、夏場だけ草丈の低い草原になるようなユーラシア大陸北部のツンドラ帯などが繁殖地であるため、その環境とよく似ていることから鳥が集まってくるのでしょう。



(1) 年間を通して目撃される鳥類（留鳥）

一年を通してみられる留鳥（表1参照）は、カイツブリ、シロチドリ、クロサギ、ツミ、ミフウズラ、シロハラクイナ、バン、キジバト、ズアカアオバト、リュウキュウツバメ、ヒヨドリ、イソヒヨドリ、ウグイス、セッカ、メジロ、スズメ、ヒクイナの17種（移入種除く）です。この17種の中で個体数も多く、ふつうに観察される種類はキジバト、リュウキュウツバメ、ヒヨドリ、イソヒヨドリ、ウグイス、セッカ、メジロ、スズメの8種類でした。これらの8種は住宅地から^{やしきりん}屋敷林、^{のうち}農地、^{そうげん}草原、^{ぞうきばやし}雑木林、海岸など広い範囲にすんでおり、最も身近に目撃されます。

^{せいそくかんきょう}生息環境ごとに見てみると、住宅地や農耕地、牧草地などでは、セッカ、イソヒヨドリ、キジバト、リュウキュウツバメ、ミフウズラなどが多く生息しています。島に数箇所ある大きなため池ではバンやカイツブリなどが生息し、森林地域ではズアカアオバトやツミ、ウグイス、ヒヨドリ、メジロなどが多くみられます。海岸ではクロサギがしばしば目撃されます。

表1. 一年中見られる鳥類（留鳥）

種名	主な生息地	繁殖確認	備考
カイツブリ	ため池	繁殖？	
シロチドリ	港・海岸・草地	繁殖（6月）	一部冬鳥
クロサギ	海岸	繁殖？	白色型もある
バン	ため池	繁殖（4～8月）	
ツミ	森林（城山）・キャンプ場	繁殖（5・6月）	
ミフウズラ	農耕地・牧草地	繁殖（4～7月）	
ヒクイナ	サトウキビ畑	繁殖？	
シロハラクイナ	ため池の周り	繁殖（4～8月）	
キジバト	農耕地・森林・住宅地	繁殖（周年）	
ズアカアオバト	森林（城山）	繁殖（4～7月）	
リュウキュウツバメ	住宅地・畜産センター	繁殖（3～8月）	
ヒヨドリ	住宅地・農耕地・森林	繁殖（5・6月）	
イソヒヨドリ	住宅地・農耕地・森林・海岸	繁殖（3～7月）	
ウグイス	ススキ草原・森林	繁殖？	
セッカ	サトウキビ畑・牧草地	繁殖（5～7月）	
メジロ	住宅地・農耕地・森林	繁殖（3～7月）	
スズメ	住宅地・農耕地	繁殖（3～7月）	
アミハラ	草原、畑	繁殖	（帰化鳥）
ベニスズメ	草原	繁殖？	（移入鳥）
ドバト	住宅地	繁殖？	（帰化鳥）
インコ的一种	住宅地	繁殖？	2羽で目撃（移入種）
ニホンキジ	低地森林	繁殖？	1番を目撃（移入種）

(2) 夏場に渡来してくる鳥類(夏鳥)

城山などの森林地域には、尾羽^{おぼね}がリボンのように長いサンコウチョウが夏場に飛来してきて、ここで子育てを行います。また、広い畑や牧草地などにはツバメチドリが飛来してきて繁殖しているようです。数は少ないがときどきアカショウビンが見られることもあります。

一方、海岸地域ではカモメ科のエリグロアジサシやベニアジサシなどが6月頃飛来してきます。この鳥は岩礁^{がんしょう}に集団繁殖地(コロニー)をつくり子育てを行います。よく小さな群れで沖合いを飛び回りながら、キビナゴなどの小魚を追う姿を見かけることでしょう(表2参照)。

(3) 秋から冬にかけて訪れる鳥類(旅鳥および冬鳥)

伊江島には広い牧草地や農耕地が広がっているため、秋から冬、そして、春の時期にここを利用する野鳥の数が多くなります。

秋口にはアカハラダカやサシバが飛来し、大部分はフィリピンや東南アジアあたりまで渡って行きます。しかし、サシバは一部が居残り、伊江島で冬越しをしてしまうものがあります。これを「越冬サシバ」と呼び、伊江島でもかなりの数が見られます。

伊江島空港のような草地在り場所では、ムナグロ、キョウジョシギ、サシバ、チョウゲンボウ、ムネアカタヒバリ、アマサギ、チュウサギ、ジョウビタキ、ツグミ、ムクドリなどが普通に観察されます。また、まれな渡り鳥も数多く確認されており、コシャクシギ、アカガシラサギ、タゲリ、コミミズク、ホシムクドリ、ツバメチドリ、エリマキシギ、オオチドリ、ウズラなども記録されています。

伊江島はこうした渡り鳥が休息してさらに南に渡る体力をたくわえたり、冬越したりする場所になっています。

表2. 渡来種で繁殖またはその可能性のある鳥類

種名	よく見られるところ	繁殖・夏鳥・冬鳥・その他
サンコウチョウ	うす暗い森林	繁殖(5, 6月)夏鳥
ホトトギス	森林など	繁殖? 夏鳥・旅鳥
エリグロアジサシ	海岸、港	ウグイスに托卵? 繁殖(7, 8月)夏鳥
ベニアジサシ	海岸、港	繁殖? 夏鳥
コアジサシ	海岸、港、砂浜	繁殖(6月) 夏鳥
ツバメチドリ	軍用地、飛行場	繁殖? 夏鳥
ムクドリ	飛行場、畜産センター	5, 6月にペアでいるのを観察 繁殖(*沖縄県内初確認) 冬鳥として渡来し数多い

7. 伊江島の探鳥地マップ

〔探鳥地一覧〕

	城山（グスク）周辺
	伊江島空港
	青少年旅行村
	農民道場周辺
	リリーフィールド公園
	湧出（ワジィ）周辺
	畜産センター周辺



